

<http://grimreaper.is-mine.net/>

赤アカ黒クロサウダージ

著：射月アキラ

一 死・満ちる

小さな村は、赤と黒に彩られていた。

つい数分前まで少ないながらも人が行き来し、言葉が飛び交う場所だった道に、かつての面影は残っていない。土を踏み固めただけの路上には血肉が散り、左右に並んでいた家屋はごうごうと燃え盛っている。炎に舐められた木材は炭化し、地面に落ちた影と共に濃い黒の勢力を広げていた。

日が沈みかけている今、夕日と夜がせめぎあう空すらも赤と黒の色彩が支配しているようだ。

鮮烈で残酷な二色は、ひとり立ち尽くす少女——シルヴィの目を奪って離さない。

声も出せず、身動きすらできないまま、シルヴィはただ呆然と赤と黒を見つめ続ける。すでに記憶に刻み込まれているであろう風景を、自分の大切なものが壊れていく様を、ひたすらに視覚し続ける。

時折、思い出したように呼吸する。息苦しいのは、決して周囲で火が燃えているせいだけではない。十代も後半、すでに身体的には成熟しているとはいえ、この状況を受け入れるだけの精神をシルヴィは持ち合わせていなかった。

中身を全て外に出してしまおうとする消化器官をどうにか抑え込み、シルヴィは小さく一步を踏み出した。

そこらじゅうに、村の残骸が散らばっている。村を構成していた建物の建材と、村を作っていた人々の欠片。もはや嗅覚が麻痺しているのか、一帯に満ちているであろう鉄くさい血の匂いや木材と人体の燃える匂いを、シルヴィは知覚できない。

シルヴィは道だった場所を進む。高く結いあげられた赤毛は、炎の熱でかきまわされる風にも揺れず、血で濡れて背中に張りついている。

生き残った人間はいないものか、と周囲を見回しても、見える範囲は誰のものかも分からない死体だらけだ。村の住民の顔と名前は、シルヴィの中で全て一致しているにも関わらず。

ここにあるのは、破壊と蹂躪のあとだけだった。辛うじて生き延びているのは、シルヴィひとり。

そして——もうひとつ。

背にコウモリの翼を生やした人影が、シルヴィの前方にたたずんでいた。

影がそのまま立ちあがったかのような、光すら吸収する黒い体。対して、翼だけがぬらぬらと周囲の赤い光を反射している。

シルヴィは、人影のかつての姿を記憶している。短く刈り込まれた暗褐色の髪と、日に焼けた肌を記憶している。背負った業に似合わない、人懐っこい笑みを記憶している。指導の厳しさと、大きな掌の優しさを記憶している。

「ロ、ラン……」

その名を、記憶している。

しかし、振り返った人影の瞳に、かつての色は残っていなかった。炎と夕日の逆光を背負ってなお赤く輝く瞳に、人間らしさなど微塵もない。人格を形成する理性と感情が抜け落ちた、獣のような瞳。

「ロラン……!!」

シルヴィは拳を握りしめて、もう一度名を呼ぶ。

『彼』が、その声に応えることはない。その声を知覚することはあっても、内容を理解することはない。少女の声の弱さも切実さも、感じることはない。

理解してなお、シルヴィはヒトであったものの名を呼んだ。

今度こそ、明確に、獣の瞳がシルヴィを見とめる。ひとりの少女としてではなく、ひとつの破壊対象として。

赤い瞳から放たれる狂气的な色に、シルヴィが思わず身をひく。

直後。ロランであったものは凶器と化した爪を振るい、その切っ先は人外の速度でシルヴィの右目へ――

二 天使・告げる

森の中で仮眠をとっていたシルヴィは、目を覚ましてすぐに横方向へ転がって跳ね起きた。

腹を狙った一撃は、脇腹をかすめるようにして地面に突き刺さる。直前まで見ていた悪夢と立ちくらみからの頭痛に眉を寄せ、シルヴィは小さく舌打ち。

周囲の状況を即座に把握する。

場所は、行人たちが通る細い道から少し離れた森の中。時刻は昼前であるうか。昇りかけた太陽からの光は、木々の葉を通して地面に落ちていく。

襲撃者はヒトガタ。ではあるものの、明らかに人間ではなかった。

夢で見た——実際に燃え盛る村の中で見た——ロランであったものと姿は似ている。黒い体に黒い翼、赤い瞳。違いといえば、その手に槍を持っていることだ。初撃にも使われた凶器は、刃の根本まで地面に埋まっている。

ヒトガタは〈悪〉と呼ばれていた。

その由来は、聖典の時代までさかのぼる。

曰く、かつて生き物は神に全てを支配されていた。自ら演じて自ら観るしかない人形劇に辟易した神は、生き物に生死の概念と本能と自我を与えた。いくつもの世代を経て進化していった自我——思想は多種多様に分化し、その先で元・人形が狂ってしまうほどに強くなった。

破壊と凌辱の限りを尽くす生き物、特に人間を危険視した神は、人間から危険な思想だけを切り取って、別の存在に昇華させることによって問題を解決した。

人間を罪に駆り立てる、悪徳と総称される感情の権化——〈悪〉として。

以降、人間が凶悪な事件を起こすことはほとんどなくなったという。しかし代わりに〈悪〉が人間、他の生物、あるいは無生物すら区別することなく、様々なものを破壊してまわるようになった。

〈悪〉から他のものを守るため、というよりは〈悪〉を滅ぼすために神が講じた策はあるのだが、その策は不完全という他ない。現に、シルヴィという人間がこうして〈悪〉に襲われている。

土を散らしながら、〈悪〉が槍を抜いた。相対するシルヴィも、それに合わせて戦闘態勢に入る。意識の奥底に封じていた悪徳を、表面にまで解放。神の意志によって物質化——〈悪〉という存在に昇華しようとするエネルギーを体内

に押しこめ、〈悪〉に与えられるはずだった力を得る。

変化は急速に訪れた。

シルヴィの赤毛は黒くなり、前を見据える赤褐色の瞳は真紅色に。背中では弾けるような音がしたかと思えば、肩甲骨の間からコウモリの黒翼が生えた。

姿こそ〈悪〉に近いが、シルヴィの目は理性の色を失っていない。槍による刺突を繰り返す〈悪〉を前に落ち着いて回避行動をとり、反撃。カウンターのようにして、拳を〈悪〉の腹部に叩きつけた。

ゴッ！ と、硬質な音が鈍く響く。

生物的な柔らかさがない〈悪〉と、力を解放して戦いに特化したシルヴィの拳は、おおよそ同程度の硬度を持っていた。逃げ場のないエネルギーが〈悪〉の体に突き刺さり、両足が宙に浮く。

人外を殴り飛ばしたシルヴィが追撃。致命傷になりうる頭部ではなく、槍をたずさえる右腕を狙って足を振りおろした。

再び響いた音は、やはり鈍い。しかし、それが意味するところは先刻とは大きく違う。

シルヴィの足が直撃した〈悪〉の腕は、関節の存在しない場所で折れ曲がっていた。力の入らなくなった手から槍が転げ落ち、地面に当たって二、三度跳ねる。

シルヴィが槍に手を伸ばすのと、〈悪〉が左手を振るうのはほとんど同時だった。仰向けで倒れ、さらに右腕を踏みつけられているという圧倒的不利な状況でありながら、〈悪〉の一撃は鋭い。迷いなく脚部を狙ったのは、ある程度のダメージを与えれば移動能力に大きな影響を与えるからだろうか。

しかし、効率的な行動というものは得てして読みやすい。かがんだ体勢になっていたシルヴィは、背の翼で〈悪〉の爪を受け止めて払う。うまく力を乗せられていない一撃は、それだけであつさりと弾かれた。

〈悪〉の槍を手にしたシルヴィは、無防備になった胸に切っ先を突き立てる。貫通に特化した凶器は硬い体を貫き、〈悪〉はあっけなく絶命。致命傷となった胸の傷から亀裂が広がり、無機物じみた硬さをもつ骸は渴いた音をたてて砕け散った。

「――最悪な朝だ」

〈悪〉の残骸を赤い瞳で一瞥して、シルヴィが呟く。

大きいもので握り拳程度の欠片になった〈悪〉は、時間が経過すれば砂粒大にまで崩れて土と同化する。周囲に悪影響を与えることもないので放置しても

構わないのだが、シルヴィはしばらく黒髪赤目、黒い翼を生やした姿を保ったまま周囲を警戒していた。

安全を確認すると、ようやく力を抜いて一息。〈悪〉の力を解放していることを示す容姿は元の赤毛と赤褐色の瞳に戻り、背の翼も消失する。

体を伸ばす際に空を見上げ、シルヴィはもう一度——今度は呆れの色が強い——息を吐き出した。

すでに、日はかなり高いところまで昇っている。〈悪〉が活発化する夜を避けて眠ったとはいえ、「朝」というには少々遅すぎた。

朝から昼までの間は眠ることができたと軽く考え、シルヴィは体をほぐしてから土が露出した道に出る。慣れてもない野宿に準備なしで挑んだ割に、調子はそれほど悪くない——もつとも、その程度のこと德音をあげていられる状況でもないのだが。

頭上から降り注ぐ陽光に目を細め、シルヴィは道の先を睨む。村を焼かれてから、シルヴィの歩く方角は変わっていない。

〈悪〉と同じように理性を欠落させてしまったかつての師、ロランを追い続けてすでに三日。

疲れることもなく進み続ける存在を追うことは、生身なうえに手負いのシルヴィには厳しいものがあつたが、あのような状態になったものが近づく場所と叫びたら目星がついた。

破壊衝動を解消するにはちようどいい、多くの命を殺せる場所が近くにある。港町アンブシュール。大陸の北端に位置する商業の中心地だ。

広い流域面積をもつリヴィエール川の河口に位置するために、荷物の運搬などに陸路が利用されることはほとんどない。代わりにシルヴィの歩く街道——というには少々素っ気ないが——は、周辺の村とアンブシュールを繋ぐ最短のルートとして活用されている。量よりも速さを求める場合や、大きな儲けを狙わない個人の行商人が利用する程度のものだが、その地理的特徴はシルヴィにとってありがたいものだった。

人目に触れる可能性が少ない。何より人の足で進むには最適の道だし、うまくいけばアンブシュールの手前でロランの進路に先回りできる。

だからといって、のんびりしている暇があるのかと言えばそんなことはない。元々の速度が違うのだから、当然のことだ。シルヴィはもう一度空を見上げ、太陽の位置から方角を推測して進むべき方向を見定めると、北へと進路をとって走り出した。

ロランの移動能力を考えると、夜半すぎにはアンブシュールに辿りついてしまふ。その前に、シルヴィは彼の前に立ちふさがらなければならない。

*

聖典に曰く、神は全知全能の存在である。

世界を創り、生命を創り、その全てを細部に至るまで支配していた。支配に飽きると、創りだした数多の生命ひとつひとつに意志を与えるということまでやってのけた。

それだけを聞けば、なるほど、全知全能でなければできないことではある。しかし現状、世界のカタチが完全とは言い切れない。

強すぎる意志は「悪」を生み、神の加護は一部の人間のみが受けられる。

教会の近くで生まれたものと、そうでないもの。二者の間に生じた差を、前者は信仰心の有無による区別といい、後者はいわれのない差別と嘆く。

人口数十人、という規模の小さな村で生まれ育ったシルヴィは、言うまでもなく神の差別に苦しむ人間だった。

赤い髪を馬の尾のように揺らして、シルヴィは森を貫く道を駆ける。

左右をふさぐように立ち並ぶ木々の他には、空と雲くらいしかない景色だ。距離感を維持し続けるのは難しく、太陽の昇り具合——あるいは沈み具合から時間を読んでほしいの距離を計算するしかない。

後ろを振り返れば、走るにつれて遠ざかっていく山々が見えるはずなのだが、シルヴィはあえてそちらに目を向けなかった。

愚直に、前を見る。

太陽はすでに真上を通りすぎ、南から西へと進路を変えている。かすかに潮の香りは漂ってくるものの、町を囲んでいるはずの外壁が見えてこないことにシルヴィは焦りを感じていた。

できることならば、町から離れた場所でロランと相対したい。しかし、二人の進路が交わる場所に着いてすぐに戦闘に入ることは避けたかった。

姿の見えない相手に対して、どのように動けばいいのか。ぎりぎりまでアンブシュールに近づくべきか、余裕をもって町から離れた場所で迎え撃つか——シルヴィの思考はいまだにまとまっていらない。

今日だけで何度となく直面した二択に、もう一度ぶち当たる。今度こそ答えを出さなければと、自身を追い込むことだ。今が初めてではないのだが――

「生まれ」

突如、空から声が落ちてきた。

有無を言わせない命令に、シルヴィは思わず足を止めてしまう。薄れていた疲労が一気に体へのしかなかった。

舌打ちがこぼれる。虚空であった場所から声が聞こえてくる非常事態の中にあつて、シルヴィはその正体に気づいていた。

人間にできないことを当たり前のように行ってみせ、さらに人語を解するものは、この世に二種類存在する。

一つは全知全能の神。そして、二つめは、

「天使か……」

上下する肩を気力で押さえつけ、シルヴィは呼吸の合間に言葉を返す。憎々しげな口調なのは、行く手を遮られたという理由だけではない。

見上げるようにして睨みつけた先には、金髪碧眼の男が浮遊していた。背中からは白鳥を思わせる純白の翼が生え、同様に汚れの一切ない白い衣服をまとっている。

〈悪〉とは正反対の色を持ち、正反対の役目をもつ存在――天使。

悪徳の具現化によって発生するようになった〈悪〉から人間を守るため、神によって創られたものだ。白い翼は飛翔のための器官ではなく、純潔の象徴として天使の背中にあるだけで、現に浮遊している天使がはばたく様子は見せていない。

「序列四位〈主天使〉の石柱。三日前に発生した〈悪堕ち〉の破壊を任として下界に降りている」

天使は坦々と自己を語る。

肩で息をしながらも、シルヴィは口角をつりあげて苦笑。深く呼吸をして息を整え、天使をまっすぐに見据えた。

「教会もないような村で育った私が、序列なんて言われて理解するだけでも？」

「〈悪堕ち〉くらいは理解しているだろう、人間――否、〈悪使い〉」

言つて、天使は表情を変えずに首をかしげる。

人間と関わることの多い天使は、両者の間で交わされる会話を円滑に進めるため、人間の容姿や行動を徹底して模倣している。

故に、動作ひとつひとつに何かしらの意味が含まれているわけではない。感

情などを持つこともなく、鏡像のように人間の動きをまねているだけだ。

「本来〈悪〉となるべき悪徳を身の内に封じ、〈悪〉となるべき力をふるう人間を、今更罰することなど考えてはいない。ただ、そうして生まれた〈悪使い〉が悪徳を封じ続けることができなくなった場合、通常の〈悪〉より強くなる」

「だから天使様の獲物を人間ごときが奪うな、と？」

「人間風に言えば、そうなるだろうな」

悪意もあらわに噛みつくシルヴィに、天使はにべもなく答える。

その態度はシルヴィの視線に殺意にも似た激情を含ませたが、天使は臆することもない。

「自らより強い存在に対して、挑む理由がどこにある。自死するならば方法を選んだ方がいい」

「分かったような口を……！」

低く、シルヴィが吠える。

元より、シルヴィに死ぬ気などない。ロランが〈悪墮ち〉と呼ばれる存在になつてしまったことを理解した上で、〈悪墮ち〉がシルヴィをはじめとする〈悪使い〉よりも強い性質を持っていることも知覚した上で、ロランの行く先に向かつている。

〈悪使い〉であつたロランは、自らの体に封じていた悪徳を抑えきれなくなつて〈悪墮ち〉となつた。〈悪使い〉にとつての死とは、〈悪〉などと戦つて死ぬか、信仰心のある人間に捕えられての処刑か、〈悪墮ち〉に成り果てるかのいずれかだ。それほど一般的な現象であり、神の摂理に逆らつて力を手に入れている以上、背負うべきリスクのひとつである。

だから、シルヴィはロランを憐れんではない。〈悪墮ち〉とは、誰でもかかる可能性のある不治の病のようなものだ。

では、どうしてシルヴィはロランという〈悪墮ち〉に固執するのか。

「——お前は今日殺す〈悪墮ち〉を二人にしたいのか？」

シルヴィの言葉に、天使は初めて表情を変えた。

怪訝そうに眉を寄せる。鏡像のように浮かべた表情が示すのは、疑問。

「何を言っている」

「〈悪使い〉には強い意志が必要とされる。神の摂理に逆らえるだけの、強力な意思だ」

「悪徳が〈悪〉となるように、悪徳を〈悪〉としない意志を具現化する、と言いたいのか」

シルヴィは頷いて応える。

もつとも、その程度の知識ならば、天使という機能に含まれている〈主天使〉も持っているはずだった。現に、相槌は疑問形を使っているが、その性格はむしろ確認に近い。

「この際だから言ってしまうが、おそらく私はこの道を引き返すか反れるかすれば、〈悪堕ち〉になりさがるだろう」

特に悲観する様子もなく、シルヴィはさらりと说ってのけた。

「悪使い」にとつて、信念とは曲げてはいけないし曲げられてもいけないものだ。ロランは自分の目の前で誰一人として〈悪〉に殺させない、という信念のもとに行動してきたが、三日前にその信念は曲げられた。その時に殺されたのは一人のこどもだが、ロランが〈悪堕ち〉と化したことで、私以外の村の住民が命を落とした。そして私は、そのロランを殺すつもりでここにいる」

天使の表情が欠落する。

人間の模倣をやめた天使は、数十秒にもわたってシルヴィを見つめ――背の翼を羽ばたかせることもなく、わずかに上昇して後退、そののちに左方向へずれる。

距離をとり、さらに道を開ける天使の行動は、シルヴィからすれば異様なものに映った。ここで天使と戦うことを望んでいたわけではないのだが、ある程度以上の足止めはくろうものだと思っていた。

「――行け」

天使の声と表情に、感情のようなものは少しも出ていない。しかし、口を開いた際のわずかな逡巡が、天使の心情を表しているようにも見える。

裏があるのでは、と勘ぐってみるも、天使から何かを読み取ることはできない。

「……なんのつもりだ？」

「意志の力とやらに興味があった」

問いに答える声は、どこまでも平坦だった。

「〈悪堕ち〉は、夜半には港町アンブシュールに到達する。日の入りと同時、我々はその進路を塞ぎ、攻撃をしかける。たとえお前がそこにおいて、そのときに〈悪堕ち〉となっていないならうと、だ」

天使の宣言に、シルヴィは応えることもなく前へ進む。

ためらっているような暇はない。何かをたくらんでいるとも考えにくかった。そんなことをしても意味はないからだ。

何事もなくシルヴィは天使の前を通り、

「……感謝する」

口をつけて出た言葉が、天使に動きをもたらしした。

徹底された無表情は、むしろ表情を作るだけの余裕すらないようにも見える。ただ、深海のような冷たさをたたえた青い瞳が、動揺に揺れていた。

シルヴィは足を止めることもなく走り去る。

〈悪使い〉と天使。両者ともに〈悪〉と戦うものでありながら、二つは相容れない存在だ。

神に逆らって力を手にしたか、神から目的と力を与えられて生まれたか。この違いはあまりに大きく、世界と神の摂理からして容易に埋まる溝ではない。

——しかし。

残された天使は思考する。人間の意志に興味を持ってしまうような自分が〈悪使い〉に追われる〈悪堕ち〉の殺害を命じられたのは、偶然なのだろうか？ 天使の軍勢を率いるという目的を与えられ、人間と接することもほとんどなかった自分が、〈悪使い〉の意志を知りたいと思ってしまったことは、はたして偶然なのだろうか？

神は、自ら演じて自ら観る人形劇に飽いて生物に意志を与えたとされる。

ならば、〈悪使い〉と天使の溝を埋めることだって、やっつのけるのではないだろうか？

相容れない二つの存在が交われれば、神であっても想像できないようなことが起こると踏んで、この邂逅があつたとすれば、

「考えても、意味はないか」

天使はひとつ息をつき、〈悪使い〉と〈悪堕ち〉が激突する地点へ目を向ける。

上空から見ると、広がる森の向こうに草原と石製城壁が視認できた。

おそらく、森と草原の境界付近が戦いの場となるだろう。アンブシユールからある程度の距離があり、森の中のような障害物もない。戦うにはちょうどいい場所だ。

大きな被害が生じることは、まずない。天使が悩むべきは、〈悪堕ち〉の近くに天使以外の存在——特に人間を送ってしまったことによる、降格の危険性だった。

三日・沈む

シルヴィが森を抜け、草原に辿りついたところには、日は沈みかけていた。西からの赤い夕焼けと、東からの黒い夜。赤く照らされた下草と、その隙間に落ちた黒い影。

そして、赤い瞳と黒い体。

草原に広がる色彩は、そのまま三日前の再現だった。

シルヴィの息が詰まる。

精神的な傷が癒えるには、三日という期間は短すぎた。ぐらぐらと揺れる視界を気力で支え、崩れそうになる足で地を踏みしめる。

人の影がそのまま立ちあがったような黒い体も、非生物的にぬらぬらと光を返す黒い翼も、獣のような赤い瞳も、心底恐ろしい。シルヴィを見とめて、口の端を吊りあげて笑った〈悪堕ち〉が恐ろしい。炎と影を思わせる、赤と黒に彩られた景色が恐ろしい。

シルヴィは思わず右目に手を当てる。指先で触れた位置にあるのは、眉尻から目尻にかけて走る傷跡だ。〈悪堕ち〉によってこの傷を受け、シルヴィは気を失って——ただ一人助かった。

どうして〈悪堕ち〉がシルヴィにとどめを刺さなかったのか。知る由などないが、希望的観測が当てはまるとしたら、

「ロラン……」

彼の自我がまだ残っているのだろうか。

しかし、応えはない。答えもない。〈悪堕ち〉は静かにシルヴィを見つめ、獲物を見つけた獣のように闘志をみなぎらせている。

逃げることなど最初から許していない。強者を打ち倒す。それは、シルヴィが〈悪使い〉として成り立つための目的であり、戒めだ。乗り越える相手が元は善良な人間であったとしても、自らの師であろうと、関係ない。

右目に当てていた手を握りしめる。と同時に、シルヴィの髪は黒く、瞳は赤く染まった。弾けるような音がして、背中からコウモリの翼が生える。

一陣の風が、草原を駆け抜ける。

下草を弾き飛ばしながらの、〈悪堕ち〉の突進。勢いそのままに突きこまれる右手の貫手を、シルヴィは手首を掴むことによって減速させ、顔を傾けて避ける。

頬に引きつるような感覚。皮膚が薄く切れたことなど意識の外に追いやつて、次の行動へ。

手首を離し、姿勢を低くして〈悪堕ち〉の胴体に拳を叩き込む。金属同士が叩きつけられたような、硬い音が響いた。

「——っ！」

拳から肩まで痺れが広がる。歯を食いしばつてうめき声をこらえ、〈悪堕ち〉が蹴りを放ってくることを見越して、それよりも早くすれ違うように斜め前方に転がりこむ。

勢いを受け流して地面に足をつけたシルヴィに、〈悪堕ち〉の蹴りが迫る。

息をつく間もなく、体を傾けて回避。ぼっ、と空気が破裂する音と共に、シルヴィの顔のすぐ横を通りすぎた足先が、その後ろで揺れていた髪束の一部を引きちぎった。

伸びきったまま横薙ぎに振るわれた〈悪堕ち〉の足を、姿勢を低くすることなんとか避け、シルヴィは顔をしかめる。

〈悪堕ち〉の一挙手一投足は、その全てが人外の速度で繰り出される。動きに伴って空気は押され、風となってシルヴィの耳に圧を加え、半規管を揺さぶり、目を眩ませる。

耳と目が正常であつても回避が精一杯な現状、一瞬であつても二つの感覚を潰されてしまえば反撃も回避も不可能になる。

狙いすまされた漆黒の翼の一撃が、シルヴィの胴体に叩き込まれた。

声すらあげる暇もなく、肺の中の空気はまとめて吐き出される。草のはえた地面に背中をしたたかに打ちつけ、空気を欲した肺腑が痙攣。一、三度咳込む。

〈悪使い〉と〈悪堕ち〉の違いが、ここにきて明白になった。〈悪〉の力を身の内に封じながら戦うものと、封じこんでいた〈悪〉が解放され暴走したものの。どちらの方が戦いに特化しているかという問いに対し、議論の余地はあるだろうか。

〈悪堕ち〉は、追撃することもなくシルヴィを見下ろしている。赤い目に弱者をもてあそぶ愉悦をたたえ、獲物の抵抗を待っているようにも見える。

シルヴィの中で、熱量が膨れあがる。内側から身を焦がすような激情。それが怒りなのか悔しさなのかも自覚しないまま、シルヴィは立ち上がって〈悪堕ち〉と再度対峙する。

一瞬とはいえ、酸素を失った体は強い脱力感に包まれている。たった一撃でこれならば、これ以上の戦いを乗り切るのはかなり難しい。もとより、シル

ヴィは精神的にも不安定な状態だ。

「いつ心が折れ、〈悪堕ち〉と化してしまうかも分からない。」

「それでも、私は……」

シルヴィは拳を握りしめ、大きく膝を曲げる。

〈悪使い〉と〈悪堕ち〉、二対四つの赤い瞳が視線を交わす。意志をかためた視線と、残虐に笑う視線が混じりあう。

「あなたを超える！」

直後。シルヴィの足が踏み込みの一步を炸裂させた。

握りしめた拳は、〈悪堕ち〉の下腹部を抉るように軌道を描く。右肩まで響いた手ごたえに、シルヴィは確かな手応えを感じていたが、〈悪堕ち〉の表情からはダメージなど全く感じられない。

長い黒髪を揺らし、〈悪堕ち〉が首を傾げた次の瞬間から、刃の嵐がシルヴィを襲った。

両手十指。その全てが刃となり、至近距離から連撃が繰り出される。殺しの意志が見えない、もてあそぶような攻撃がシルヴィの皮膚を切る。

鮮血が散る。にも関わらず、シルヴィの瞳は揺るがない。

更なる一步を踏み出して、再度拳を握りしめて——シルヴィの喉は、血を吐くような声を吐き出した。

*

シルヴィという人間は、昔から負けず嫌いな性質を持っていた。

村で共に遊んでいた同年代の少年にも、喧嘩で負けないように可能な限りの手を尽くした。大の大人を相手に、無謀なまでに果敢に挑んだこともあった。

人類の天敵にすら勝ちたいと願ってしまふほど無鉄砲で、ある意味まっすぐな少女だった。

〈悪使い〉の力を手にしてからも、それは変わらない。村を守る、という大義名分はあったものの、本当の目的は強い存在に打ち勝つことだった。

ある日、村を訪れたもう一人の〈悪使い〉——ロランに師事を求めたのも、より強くなるための手段にすぎない。

いつかは師を超える。〈悪〉を殺すために創られた天使すら超える。

ひたすらに強さを求め続けたシルヴィイが〈悪堕ち〉という壁に突き当たったのは、三日前のことだった。

*

連撃の合間をぬって、拳は〈悪堕ち〉の顎へ突きささった。

クリーンヒット。硬質な音と共に〈悪堕ち〉の体が吹き飛び、両手の爪からシルヴィイの血が線を描く。

肩を落とし、シルヴィイは荒く息を吐き出した。

全てを破壊して殺しつくす〈悪〉の衝動が、〈悪堕ち〉に向けられた結果として、今の拳が命中したと言ってもいい。内側から溢れでる破壊衝動を抑えきれない。

加えて、世界を赤く染めあげながら沈む太陽が、もうすでに地平の底に埋まりかかっていた。

あと数分もしない内に、天使の軍勢がシルヴィイと〈悪堕ち〉を滅ぼしにかかるだろう。

手詰まりなのか。いまだに断定ではなく疑問形を使うのは、シルヴィイの最後のあがきとも言えた。断定に変わった瞬間、シルヴィイは〈悪〉の衝動に自我を食らいつくされる。

——壊せ。

そんな幻聴すら、聞こえてくる。

精神の奥底でそそのかす〈悪〉の声なのか、あるいは〈悪〉に食われかけた自分の意志の声なのか、シルヴィイには判断がつかない。

ただ、その声はとても心地よかった。

ふつり、ふつりと湧きあがる感情に戸惑いながらも、シルヴィイは笑う。心地よさと同時、懐かしさすら感じる声に押され、シルヴィイは〈悪〉に——〈悪堕ち〉に近い存在になっていく。

——殺せ。

〈悪堕ち〉がゆっくりと立ちあがった。数瞬前まで限界すら感じていたというのに、シルヴィイは敵が倒れていないという事実に関心から喜んでいて。

狩られる側に立っていたはずが、いつの間にか〈悪堕ち〉を獲物として見て

いる。

世界が反転しているようだった。恐怖は憐憫に、苦境は好機に。理解不能な現象を前に、しかしシルヴィが強く感じているのは、途方もない熱量だった。

体の奥底が熱い。

意識の奥底が熱い。

もはや聞きとることすら困難なほどに破壊と殺戮ばかりを叫び散らす幻聴が、熱い。

〈悪〉の破壊衝動を抑え込む必要など、最初からなかったのではないだろうか、とすら思う。

それほどまでに、〈悪〉とシルヴィの欲求は似通っていた。力を求め、それに向ける相手を求める、破壊衝動と向上心が響きあう。

ふらふらと覚束ない足取りで地面を踏むシルヴィに、〈悪堕ち〉が突進。

地面を抉る一步が風のような速さを実現し、まっすぐにシルヴィの元へ。接触すると同時、刹那の間に打撃音が重複して響いた。

人間が届くはずもない領域に踏みこんだ二者——〈悪使い〉と〈悪堕ち〉は、その力を存分に振るっていた。互いに壮絶な笑みを貼りつけ、目の前の存在を破壊することだけを考える。

拳が交わり、手刀が行きかう。その全てが命を奪いうる。応酬を繰り返しているだけで死線の上に足を乗せているようだったが、もはやシルヴィは〈悪堕ち〉に成りさがる恐怖すら感じない。

むしろ、苛烈さを増す幻聴を聞けば聞くほど、シルヴィの意志はより強固になっただけだった。

自分よりも強いものへの破壊願望。意識の奥底に眠っていたその衝動を自覚した瞬間、シルヴィは自我と理性を保ちながら〈悪〉へと近づいていく。

体の各部から流れる血が、重力に逆らって浮遊。水が凍りついていく途中で鳴る、氷同士が擦りつけられているような音が、打撃音の隙間から聞こえてくる。

氷、ガラス片、宝石——透明度を持つ物体のどれとも違う、文字通りの血の結晶が、夕日に照らされてさらに赤々と輝いている。

血の結晶が完全に形を成す前に、〈悪堕ち〉が仕掛けた。

左手をフェイントに使った直後、右手の爪で心臓を狙う殺しの一撃。

だがしかし、〈悪堕ち〉の伸びきった右腕は、シルヴィに届く前に真上に向かって屈折した。可動域を軽々と越えた関節が、破碎音とともに粉碎される。

何が起きたのかすら理解できず、〈悪堕ち〉は呆然と右腕を見つめていた。真下から襲いかかった暴力の正体はシルヴィの蹴り上げだ。

続けて、拳を打ちつける。一挙一動のたびに流れでる血液は、すでに形をなさそうとしている塊に近づいて結晶化。〈悪〉が持つ槍のような長い柄に、三日月を半分に分ったような刃が生える。

赤い大鎌。

柄を掴み、シルヴィは〈悪堕ち〉にとどめを刺そうと一歩踏み込んだ。対する〈悪堕ち〉は、脊髄反射のような荒削りでまっすぐな左の貫手を突き出す。先刻まで圧倒的な優位を維持していたとは思えないほどの、愚直な一撃はあっさりとかわされ——三日月型の刃は、〈悪堕ち〉の胸と翼を容赦なく貫く。

絶命した〈悪堕ち〉の体には、〈悪〉と同様に大小の亀裂が走る。我に返ったシルヴィが、師であった〈悪堕ち〉に触れようとするも、すでに遅い。貫かれた場所を中心にして黒い体はひび割れ、あっけなく崩れ落ちる。

直後、赤く世界を照らしていた太陽は、西の地平線へと潜りこんでいった。

四 命・歩む

「序列九位〈天使〉の石柱。下界での活動時間が多くなるに従い、与えられた名はフェリクス」

冷たい深海のような瞳を持つ天使は、そんな自己紹介と共にシルヴィの前に現れた。

その背に翼はないものの、〈悪堕ち〉へと挑もうとするシルヴィを結果的に短時間足止めした〈主天使〉で間違いない。序列は四位であったから、五段階の降格を経て地に降りたことになるのだろう。

万物の創造者である主が創った天使は、厳格な序列社会の上に生きている。一位から九位まで、役割ごとに区別された天使の中でもっとも数が多いのが序列九位の〈天使〉だ。多くの天使と主が住まう天界から降り、人間に寄り添う役割を持っている。

ゆったりした聖職者のような服を着ているのは、人間と共に生きる〈天使〉として社会に適応しようとした結果なのかもしれない。

「〈悪〉へと近づいた〈悪使い〉に興味を示した主から、対象の監視を命じられた」

「……どういうつもりだ」

平坦に告げる天使・フェリクスに対し、シルヴィの声は冷たく素っ気ない。

彼女の姿には変化が生じていた。後頭部で束ねられていた赤毛はばっさりと切られ、肩の高さで整えられている。切れ込みが入り、血に汚れていた衣服も、高級ではないものの新品に変わっていた。

向かい合う二人の現在位置は、港町・アンブシユール。その中の、海岸線沿いを走る道の端だ。

神の意志に反して力を手に入れる〈悪使い〉であるシルヴィは、町の中では罪人扱いであるはずなのだが、周囲の人々が気づく様子はない。力を発揮して黒髪赤目の姿を晒さなければ、町の中で暮らしていくことは可能だろう。暴走の危険性はつきまとうが——シルヴィには当てはまりそうにない。

〈悪〉の破壊衝動に共鳴したシルヴィは、それこそ自らの根底にある自我の基盤が揺るがなければ〈悪堕ち〉に成りさがることはないだろう。

「私は主の意志に従い、任務を遂行するだけだ。意図はない」

「教会のない村で、〈悪〉に怯える人間を助ける役目はないのか？」

「主の望むことではないからな」

平然と言ったのける天使に、シルヴィの眉根が一気に距離を縮める。

アンブシュールなど、ある程度の人口があり交通の便がある場所であれば、教会があつたり、あるいは巡礼の聖職者が訪れる。そうであれば人々は〈天使〉の加護を受けることができるのだが、教会もなく聖職者の巡礼ルートにも入っていないければ〈悪使い〉に頼るしか道はない。

主どころか天使、人間すら知っている、世界にはびこる格差は、創造者である主によつてもたらされている。

それが、シルヴィには気に食わない。とはいえ主に従うだけの天使に当たつても、なんら意味はない。

「……気に入らないな」

苦々しく吐き捨てるだけにとどめ、シルヴィは頭の後ろに手をやった。指ですこうとした髪束はなく、おろしたままの髪は思いのほか短い。空振りしたような感覚を何度も味わっているが、シルヴィはいまだに短い髪に慣れることができていなかった。

しかし、仕方ない。それに後悔もしていない。血によつて傷みすぎたうえに、〈悪堕ち〉との戦闘中、かわした攻撃が髪を引きちぎったこともあった。そのまましておくのは、あまりにも不恰好すぎる。

「拒絶は無駄だ。諦める」

「こつちの身にもなってみろ。と言いたいところだが、理解しないだろうな」
諦めのため息を吐きだし、シルヴィは海へ目を向ける。

青い空と海、白い雲と波。赤と黒とは正反対の色彩が、そこには広がっている。内陸育ちのシルヴィにとつてこの景色はこれ以上なく新鮮なものだったが、天使に監視されることが判明してしまった今、純粋に楽しむことなどできそうになかった。

「それで、人間。これからどこに向かうつもりだ？」
フェリクスが問う。

反抗の意志すら持たず、主の命令に従って動く天使は、その任務に必要な情報を集めるためだけに会話を成り立たせようとしているようだった。

感情を知らない声だ。こればかりは、長く付き合わなければどうしようもないことなのだが、シルヴィからすれば長い付き合いになること自体を断りたいところだった。

問いには無視を決めこもうかとも思ったが、それでは駄々をこねる子供のよ

うだ。青と白の色彩から目を反らし、金髪碧眼に向きなおる。

「北の島国に」

「……北？」

怪訝そうな表情を作るフェリクスに、シルヴィは彼の背後ろを指さして応える。

フェリクスが振り返って視線をやった先には、一隻の帆船が浮かんでいた。若干距離は離れているものの、その巨大さはアンブシュールの港にあって一際目立っている。

「前に、話を聞いたことがある。……まあ、それだけの理由なんだが」

北にある島国が、どんな状況にあるのか。シルヴィは全くといいほど知らない。

しかし、村で聞いた「村以外の土地の話」で印象に残っていたのは、すぐ近くにあるという港町・アンブシュールと、そこから船に乗って向かうことができる異国だけだったのだ。

家族も、家も、村もなくしたシルヴィに、これといったツテはない。であれば、なんとなく聞いたことのある土地に行ってみるのも手だろうと思えたのだ。

「金はあるのか？」

「天使も俗なことを言うんだな」

シルヴィは軽い調子で返し、

「……船乗りの一人に勝ってみせるから、用心棒として雇えと言ったんだ。海の上にも賊はいるらしいからな」

「それは——」

「悪使い」になる前から、村の中で最強を目指していたんだ。殴りかかってきた大人を投げ飛ばすくらいはたやすい」

当然のように言っているシルヴィに対し、フェリクスは言葉を失っていた。事前に取り込んでいた人間に対する知識との齟齬があったが、冷静に分析してシルヴィをイレギュラーとして分類。「そういうものだ」ととりあえずの納得をしておく。

「……なんと言っても、ついてくるんだろう？」

「当然だ」

シルヴィの問いには即答した。

どれだけ遠距離の移動をしようと、どれだけ過酷な道を歩もうと、主から監視を命令された対象——シルヴィから離れるつもりは、フェリクスには全くな

い。

ただ、一つだけ言っておくことがあった。

「海を渡るのは、容易ではないはずだが」

海の賊、遭難、嵐。北の国へ向かうには、少々どころかかなり障害が多い。生きるか死ぬかの覚悟すら問われる旅だ。軽々しく目指す場所ではない。

——のだが、シルヴィは唇をつりあげて不敵に微笑んだ。

「たやすい進み方など、人の世には存在しないよ。天使」

そして〈悪使い〉は歩む。新たなる地へ向かって。

〈了〉